



176号

2012/9/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



熱心に話を聞くプイ族の小学生(雲南省羅平県)

2011年7月

撮影:奥脇弘久

‘わんりい’ 176 号の主な目次

北京雑感(67)月餅再	2
私の調べた諺・慣用句12「汗馬の労」	3
媛媛讲故事(46)土中に隠したお金	4
中国-城市めぐり(17)成都市・その1	6
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より	8
私の四川省一人旅57塔公3日目	9
読む(番外)「ジャーナリスト山本美香さんの死…」	11
「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて②天空の家	12
四川省チベット高原・花の旅	14
スリランカ紹介(60)スリランカ人の物差し	16
アフリカの日々(65)生きる力とケニアの子ども達	17
中国の笑い話①	17
【わんりい活動報告】マントウと花巻と山西省家庭料理	18
‘わんりい’ 掲示板	19・20

【表紙写真説明】

菜の花の季節には、一面の黄色の海となる羅平。しかし、私たちが訪れた時には、そのシーズンは終わり、すすくと稲が育つ青田の広がる風景となっていた。

日本・雲南聯誼協会の会員として、支援活動をしている昆明女子高校春蕾班(少数民族の学級)の卒業式参加の後、羅平を訪れたのである。プイ族の卒業生の家庭を訪問するのが目的だった。その途中で、その卒業生の母校でもある「布依族苗族郷多依完美希望小学校」を訪れた。最初は緊張していた児童も、うちとけてきた。微笑みながらも、食い入るような目で先生の話聞く姿には敬服した。

遠隔地の子は、親許を離れて寄宿生活をしている。先生方も、この赴任地では、入浴の代わりに、地元の人と同じように、多依河で水浴するという。困難な条件の中でも、温かい人間関係のある学校生活を垣間見たようだ。

また、昆明の高校の校舎外壁に、〈尊師〉〈守紀〉の文字が掲げられていたことも思い出した。 (奥脇・記)

今年の中秋は9月30日です。昔、中国では、中秋に一家で円卓を囲み、一家の無事を寿ぎ、遠く離れた家族の身の上は満月を鏡に見立てて、その無事を確認する慣わしがあったそうです。その慣わしを受けて、中秋には無事を知らせる意味で、家族に月餅を贈る風習が生まれたようですが、だんだん、丁度日本のお中元のように、日ごろの厚情に感謝し、無沙汰を詫げる意味が込められ、贈答が一般的になりました。近年は、特に経済活動に利用されて、会社がお得意様に配るため、大量に流通するようになりました。

8月になると、ちらほらと月餅の影が街なかに現れはじめ、立秋を過ぎると、普段は取り澄ましている著名なレストランの店先にも、赤い布で覆われたテーブルが出て、綺麗な箱や缶に入った月餅が並びます。箱・缶の色彩は赤が基調で、色鮮やかに花鳥風月、美人画などが描かれていて、中には色調を抑えて水墨画をあしらったものなど、人目を引きつけるものばかりです。箱・缶の様式も工夫が凝らしており、中身を賞味した後には容器として、室内の飾りとして利用できるようになっています。

中に納まっている月餅は、直径10センチ以上のものが一つだったり、6～7センチのものが9個ほども並んでいたり、数量はさまざまですが、餡の種類もまたいろいろで、それぞれのお店が独特の味を競っています。月餅の表面には、木型に彫られた模様がくっきりと浮き出て、餡の種類が分かります。厚さはどれも2センチ以上、3センチ近いものもありますから、一人で1個いっぺんに食べるのは困難です。家族で一つを切り分けて、少しずついろいろな味を賞味する方法が一般的です。こんなところにも、一家団欒の中心に収まる月餅の魅力があるのでしょう。

綺麗で美味しそうですから、自分用に一つ買ってみたいかと思いましたが、近寄って表示価格を見て、思わず後ずさりしてしまいました。小さめのものでも300元以上、模様が綺麗で大きなものは1000元近くするものもありました。普段の生活では食料品の安さに大満足しているのに、思わず目を疑うような金額でした。会社の贈答用は直接取引をしているようで、店頭並ぶのは一般家庭で贈答用に使うものですが、それがこの値段です。中国の人々の月餅に対する心意気を感じられますね。

贈答用とは別に、自宅で食べる月餅は、スーパーや菓子店で、ばら売りで売られます。価格は3元から4

元、ちょっと大きくて美味しそうなものは6元とか7元とか書いてあります。中国の食料品の値段は、殆どが1斤いくらで表示されていて、菓子類も例外ではありません。1.2元と表示された薩^サ齊^チ瑪^マ（小麦粉を練って揚げて作った点心）を5個注文して6元用意していると、（目方の具合で）1元ですなどといわれてうれしくなったものです。ところが、月餅は違います。6元7元の表示があっても、一般に見られる〇〇元/斤の表示がないのです。つまり表示価格は、月餅1個の値段なのです。ここでも月餅は破格です。

餡の種類は千差万別ですが、私個人的には「五仁」とか「百果」と言うナッツ類が多く入ったものが好きです。しかしこれは中国の人々も好むようで、一番先になくなってしまいます。他の餡はまだいっぱいあるのに、ナッツ類は早々に品切れとなります。初めての年、それぞれのお店でナッツ類を一つずつ買って、どこのがおいしいか吟味してから、これと定めて買いに行くと、もう売り切れでした。後はどこのでも良いからナッツ類と思いましたが、どこも売り切れで、結局一番好きなナッツ類の月餅を食べ損ないました。それ以後は、月餅が出始めると直ちに、好きなお店で「五仁」「百果」を纏め買いて、チビチビと長い間楽しんだものでした。

月餅の消費期限は公称1か月ですが、実際にはもっと長い間食べられるようです。中国人の友人宅では、中秋に沢山届いた月餅を12月半ばまで食べていましたが、十分美味しく頂きました。しかし市場からは中秋を過ぎると、月餅は一斉に姿を消します。中秋の翌日に月餅を欲しいと思って行くと、もう売り切れましたと言われます。売る方は、中秋が過ぎて売れ残るのは沽券に関わると考えているのか、一切売ってくれませんが、月餅が好きな人間としては、売れ残りでも何でも良いから、せめて中秋の満月が新月になるまでは売っていてほしいと思います。

一時期、中国政府は月餅の過剰包装をやめるようにと、大々的なキャンペーンを実施しましたが、ビジネス界の行事として定着した月餅の贈答は、綺麗で洒落た包装が売り物の一つとなっていて、環境保護のためといわれてもそう簡単に質素にすることは出来そうもありません。最近、中国経済の成長が伸び悩んでいると言われます。包装の簡略化は、成長が一段落した中国ビジネス界のさし当たっての目標になるかもしれません。これからは中身で勝負の時代です。

汗馬の勞

私の調べた諺・慣用句 12

三澤 統

衆議院の解散・総選挙もいよいよ“近いうちに”あるようです。いざ選挙戦ともなると、候補者とその関係者たちは当選するために、それこそ東奔西走をすることになります。

事務所開きから始まって、ポスターの作成、ポスター貼り、政策の立案、街頭演説、公開演説会、伝言カードでの連日の訴え、等々数えあげたらきりがありませんが、こうしてあちこち動き回り、汗をかいた結果が当落につながります。

このような状況を表しているのが、「汗馬の勞」ではないでしょうか。今回のテーマは、この慣用句を取り上げてみました。

辞書には次のようにあります。

▲三省堂 大辞林：「①史記 蕭相国世家より 馬に汗をかかせて戦場で奮闘した功勞。戦功。軍功。②物事をまとめようとあちこち走り回ってする労苦。奔走の勞」

▲小学館 中日辞典：「汗马功劳 hàn mǎ gōng láo 汗馬の勞。戦場の手柄」

時代はさかのぼって、中国の前漢のころ、各地に群雄が割拠し覇権争いが続いていました。当時の戦いで武将たちは馬に乗り走り回って、馬にたくさん汗をかかせた者が軍功をあげてゆきました。戦いが終わり、勝利した側は、武将たちに戦功に従って報奨が与えられました。ところがその中でなんら汗馬の勞も無かったある者に誰よりも高い報奨が与えられたのです。そのある者とは、そして誰よりも高い報奨が与えられた理由は……。

この成語の出自は〈史記・蕭相国世家〉の「今蕭何未嘗有汗馬之勞，待持文墨议论，不战，顾反居臣等上，何也？」

の部分です。（今回蕭何¹⁾は汗馬の勞もなく、ただ筆を持って議論しているばかりで、戦いもしない。それなのに待遇は自分たちより上なのは、何ゆえか？）

漢朝建立の後、漢高祖の劉邦²⁾は功績のあった武将達への報奨の分配を開始しました。戦いに参加した多数の武将たちそれぞれが手柄を述べたてて恩賞を願ひ出ました。劉邦は蕭何の功績が最も大きいと考えたので、彼を賛侯（職位の名）に取り立てました。すると、我こそはと思っていた多くの武将たちから異論が噴出し

ました。

「私たちは皆戦場で命がけで働きました。なのに蕭何は只、筆を持って議論をするばかりで、なんら汗馬の勞もなかったではありませんか！報奨が吾らより上なのは、一体なぜなのでしょう？」

劉邦は悠揚迫らぬ態度で武将たちに言いました。

「諸君は狩を知っているだろう？」

武将たちは一斉に声を揃えて言いました。

「勿論知っていますとも」

劉邦は更に話を続けました。

「狩をする時、野獸を追いかけて殺すのは犬であるが、その犬に野獸を追いかけさせるのは人間だ。諸君たちの働きは謂わば功績のある獵犬といえよう。蕭何は一族90人もの男に呼び掛け、私と一緒に力を尽くしてくれたが、諸君は一人で私に従い、2、3人を引き連れて来た者すら殆ど居なかったではないか。よって蕭何の功績はどうしたって皆のものを超えることになるのだ」

武将たちは皆、劉邦の言うのを聞いて誰も何も反論できず心から承服し、劉邦の言うとおりに蕭何ならびに自分たちの報奨を受け入れました。

〈注記〉

1) 蕭何(?～紀元前193年)：秦末から前漢初期にかけての政治家。劉邦に天下を取らせた、漢の三傑の一人。

2) 劉邦(前256/247～前195年)：中国、前漢朝の創始者(漢朝の君主としての在位は前206以降)で、初代皇帝(皇帝としての在位は前202～前195)。廟号は高祖。字は季。
(Yahoo!百科事典より)



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

大昔、或る村に周という秀才がいました。或る年、周秀才は科挙試験のため、都に行こうと思っていました。「試験に合格して役人になるチャンスが得られればいいなあ」と思う度に嬉しくなる一方で、自分が家を離れて妻と息子二人だけ残すことを思うと、残された二人の日々の生活を心配する思いでいっぱいになり決心が鈍るのですでした。

それで妻と相談し、家族三人そろって一緒に上京しようと決めました。しかし、ひとつ困ったことが有りました。

実は、周秀才のお父さんが世を去った時に、沢山のお金を残してくれました。昔のお金と言うと、銀の塊です。あんな沢山の重い銀を持って上京することは出来るわけがないのです。では、家族みんなでこの家を離れるとしたら、お金はどうすれば良いでしょう。悩みに悩んで考えた末、良い方法を見つけました。当座の生活に使うほどの細かいものは持って行き、残りの大量の銀は裏庭にある古い土塀の下に穴を掘って埋め込むことにしました。

全てのことを片付けてから、周秀才は家の番人には番人がこれからの生活に必要なお金を与えて、そして次のように言いました。

「このお金は私たちが留守の間の生活に使ってください。その代わりに、この家を良く見守ってください」

と言って、家族を連れて上京しました。

周秀才一家が離れたおよそ半年後、大変なことが起こりました。

村に祭が有り、この家の番人が見物に行って、帰って来ると家が泥棒に荒らされ、運び出せる家財や、主人から与えられたお金が全部盗まれてしまっていました。これからどうすれば良いのでしょうか？ 主人に知られたらたいへんだろうと思うと悔しくてなりません。

番人は、主人から責任を問われ叱責されることを恐れて、いろいろ考えた末、逃げてしまうこと

を選びました。でも、遠くへ逃げるには、お金が必要なので家の何かを売ってお金に換えようと考え、裏庭のあの古い土塀の土レンガを売ことにしました。

「あの土塀はもう古くて役に立っていないのだ。けれども土塀の土レンガはまだ使えるから、土レンガは買う人がいるかもしれない」

番人は町に出かけて行き、土レンガを買いたい人がいるかどうか探して見ました。そして間もなく、賈仁という壁作りの労働者に会いました。

「どこか土レンガが欲しい家があるのかい？」

と番人がに訊ねました。

「えい、知っているともよ。ちょうど壁を作ろうという家があるのだ」

「それでレンガが欲しいっていうのか？」

「それはあたりまえのことだぜ」

「欲しいっていうなら、家に要らない土塀がある。それを解体して、レンガを売りたいのだ。どのぐらいで買ってくれるのかい？」

と二人はあれこれと交渉し続け、最後に双方が満足できる形で話がまとまりました。

やがて賈仁は、籠やスコップなどの道具を持って周秀才の庭に行き、その土塀を解体して、土レンガを自分の住宅までに運ぶことにしました。そして賈仁が周秀才の庭に着くと番人が場所を指して

「ここだ。自分でやりなさい。私は前庭の母屋にいる。何かあったら呼んでください」

と言って、賈仁を一人残すと、前庭の方へ帰って行きました。

賈仁は働き始め、壁から少しずつ土レンガを外して行きました。壁がだんだん低くなって来ましたが、賈仁は頑張って更に壁から土レンガを外して行くと壁の根元に小さな穴が開きました。不思議に思ってその穴を掘ってみますと、穴はどんどん広がって中から石の板が現れました。賈仁は好奇心から満身の力を込めてその石の板を外しまし

た。そして中を覗いてみますと、なんと、ぴかぴか光る銀の塊が一杯詰まった石釜が埋められているではありませんか！

賈仁はびっくりして口を開いたまま腰を抜かしてどさりと地面に座り込んでしまいました。目の前の情景がにわかに信じられず、目を何回も拭ってみました。それでもやはり信じられません。

「これって本当だろうか。見間違えてことではなからうか？ 何回見直しても沢山の銀の塊が目の前にあるんだけどよ。生まれてから、まだこんなに沢山の金を見たことがなかったけど」

賈仁は、呆然とただただ銀を見つめていました。暫くしてやっと我に返りました。

「どうしたら良いだろう、こんな沢山の金を」とわくわくしながら考えました。

「よし、分った。銀は俺の籠に入れて、その上に土レンガを乗せて運べば、誰にも分らないだろう」

そこで、賈仁は銀を籠の底に入れ、その上に、土レンガを隙間なく並べて確認してみました。外見からは確かにレンガだけのように見えます。

こうして、賈仁は、天秤棒で籠を担いで、同じようにして何回も往復し、こっそり石釜の中の銀塊を全部自分の家に運び込みました。

賈仁は、元々とても貧乏な人間でした。たった一人でぼろぼろの家に住んで、毎日、庭壁を作るほかに人の為に水を運んだり、薪を切ったり、畑仕事の手伝いをしたりしてどうにか今日を生き、明日はどうなるのか分らないというその日暮らしを続けて来ていました。とは言え、貧乏な暮らしの中でも金持ちになった夢は良く見ました。夢の中では、賈仁は豪華な服を着て、見事な馬に乗り、立派な屋敷に住んでいました。しかし、目が覚めればなんにもかも変わらず依然として貧しいままの有様で、町の人々からは見下げられ、「貧乏人」と呼ばれて来ました。

今日は夢ではなく、突然本当に沢山の金があるものになって嬉しくて嬉しくてどう使えばいいのか分らなくなりました。そんな状態が2、3日

続いた後興奮状態からどうにか自分を取り戻しました。そして決して皆の前で変わった様子を見せてはいけないと気が付きました。

賈仁は先ず小さい商売をやりはじめ、月日を経て小さい家を買ひ、お嫁さんを貰いました。

外目にはどうやら、商売でちょっと儲けたように見せかけました。

更に一年を経て、大きな屋敷を建て、広い畑や船を買ひ、酒屋や、質屋や、油屋などの商売を次々と始めました。町の人々は、彼を羨ましく思うと同時に尊敬するようになり、「賈員外^注」と呼ぶようになりました。でも、一つだけ思うようにならないことがありました。それは、結婚して何年経っても、子供に恵まれないことでした。

賈仁の知り合いに、陳という、人に頼まれて商売の帳簿を管理したり、子供に文字を教えたりする顔の広い人がいました。ある日、賈仁は陳さんに、

「子どもがいなければ、誰が家業を受け継いでくれるのだろうか？ 私はどうしても子供が欲しいのだ。お金で子供を買うことはできないだろうか？」と尋ねました。

陳さんは、最初は賈仁の言葉をあまり気に留めていなかったのですが、賈仁は陳さんに同じような言葉を2度も3度も繰り返しました。

「本気で子供が欲しいですか？」

「本気ですよ。何とかお願いしたいのだよ」

「お金で買うのですか？」

「お金はいくら掛かってもよい。女の子でも、男の子でもどちらでもいいのだ」

「分かりました。それではお任せください。貧しい家の親は子供を裕福な家に貰って欲しいと思うことが良くある。時間をください」

と陳さんが承知しました。

(続く)

● 注釈

賈員外:「員外」は、中国語では「地主」や「土地の有力者」を指す。「賈員外」は「賈大尽」というような意味合いになる。

司馬遼太郎の「街道をゆく」シリーズは全部で43巻あるが、20番目が、「中国・蜀と雲南のみち」である。この本の書き出しは、「四川省は、古来、巴蜀とよばれた。巴は現在の重慶を中心とし、蜀は現在の成都を中心とする。・・・」で始まっているが、私の長年の夢であるこの蜀への旅がスタートしている。今、前面のスクリーンに飛行経路が映し出されている。見ると、上海→南京→合肥→武漢と長江の流れと絡み合うように飛び続けている。そして重慶の手前で右に針路をとり、成都に機首を向けた。窓外は真っ暗。6時間余りのフライトはさすがにこたえた。NH947

去る1月30日、成田空港第一ターミナルから全日空NH0947便に搭乗し、定刻より15分遅れの17時30分頃離陸した。この便は、昨年(2011年)6月に開通したばかりの直行便である。これまでも蜀の地にはいきたいと思っていたが、北京とか上海で乗り換えねばならなかったので二の足を踏んでいたが、直行便が開設されたと聞き、このたびの旅行となったのである。NH0947便は、中央の通路をはさみ左右に3席ずつの定員120人乗りの小ぶりのジェット機である。それでもPRが行き届いていないのか、あるいはシーズンオフなのかかわからないが搭乗率は50%をかなり下回っていた。この路線が廃止とならないよう願うばかりである。私は、中国の中部、南部には殆ど行ったことがないので今後その方面の旅をしたいと思っているが、成都に直行便があればアクセスがとてもいいと思うからだ。

さて、通路側に指定した自分の席に座ると、私の左右には中国人が乗ってきた。坐ると途端に大きな声でしゃべり始めた。離陸までの30～40分間ずっとしゃべりつづけるので、静かに旅をしたい私はいたたまれなくなり空中小姐(略して空姐ともいう)を呼んで別の席に換えてもらった。空姐はスチュワーデスのことであるが、席替えをお願いした空姐は当初日本人かと思っていたら、胸のネームプレートには「潘」と書いてある。アレっ？中国人なのかと驚いた。この空姐の日本語はそれほど素晴らしかったのだ。それに立ち居振る舞いというか、ちょっとした仕草が日本人とかわらない。空姐は日本人4人と中国人1人の5人だったが、皆対応が素晴らしく楽しいフライトとなった。

空中小姐でちょっと横道に逸れるが、中国語はどんな

外来語——人名でも物の名でも漢字に置き直し、一つ一つ新たに作っていく。日本語にはカタカナがあるが中国語にはないので仕方ないのであろうが、ちょっと見ただけではわからないものが多い。

空中小姐はなんとなくスチュワーデスの雰囲気が出ているが、たとえばマクドナルドは麦当劳に当て字され、麦を扱う店なのかと思わせてしまう。私も大連で初めてこの看板を見たときには何の店かと思った。アメリカ合衆国は、美国だがアメリカ人はこんな綺麗な漢字を当てはめてもらいさぞかし満足していることだろう。ところで首都のワシントンは「貨盛頓」と書くが、都市のイメージとかけ離れていると思える。表記は一体誰が決めるのであろう。先日東京スカイツリーに行ってきたが、インターネットで調べると、中国語の表記を「東京天空樹」としようとしたところ、中国国内にすでにこの表記が登録されているので使えないとのことであった。今検討中のようなだ。誰かのいたずらか、はたまた金儲けのためなのか・・・いずれにしても日本語はカタカナのおかげでいちいち言葉を作らなくていいので便利である。先人に感謝しなければならない。

NH0947便は現地時間の23時10分ころ〈成都双流国際機場〉に着陸した。中国国内で5番目に大きい国際空港とのことだが暗くてよくわからない。空港ターミナル内に足を踏み入れると、とうとう成都に来たのだという感慨にあふれた。入国審査はスムーズに行ったが、タクシー乗り場に着くとそこは結構な行列ができてい。タクシーの数が少ないようだが電車やバスもないので仕方なく並ぶことにした。すると白タクと思いき男が近づいてきて、100円でどうかというので夜も遅いし、どうせ70～80元くらいはかかるだろうと思って乗り込んだ。白タクは夜の道をすっ飛ばし30分程度でホテル前に着いた。ホテルは、一品天下街という大層な名前の広い通りに面していた。格林普蘭特酒店と名前もいかめしい。チェックインをして早く寝ようとフロントに行き、パスポートと旅行社から来たFAXを見せると私の名前が無いという。そんなはずはないと言ったが埒がわからないので旅行社の大連支店の友人に電話するとようやくフロントからOKが出た。なぜこのような行き違いが生じたのか、説明もしてくれなかったが中国での旅行ではこの程度のことは別にめずらしいことではない。鍵

をもらって601号室に向かった。やれやれと思い上着をハンガーに掛けて時計を見るととくに午前0時をまわっていた。

今回の成都旅行は、勿論三国志の遺跡や杜甫草堂などを見たいためであるが、もう一つ目的があった。それは王さんと再会することである。王さんとは2010年秋、日本で初めてお会いした。この時、田井さんから「和光大学を卒業した留学生のお母さんが来日されている。折角だから箱根に案内してあげたい。寺西さんも一緒にどうですか」とお誘いを受け、「わんりい」会員のSさんと四人で秋の箱根を楽しんだのである。王さんは、結婚され日本に住んでおられる娘さんの出産の手伝いで来日されたのである。とてもおだやかで笑顔の素敵な方で、初対面にも拘わらず以前から知り合いだったような気がした。この度、田井さんに成都に旅行する旨を伝え、と、「連絡しておくからお会いしてはどうですか」と言うので、王さんと約1年3ヵ月ぶりにお会いできることになった。成都に着いた翌日電話すると、とても懐かしがって頂き、2月1日にホテルの前まで来てくださることとなった。

到着した翌日の1月31日は、時折日が射す暖かい一日となった。前述の司馬遼太郎の本の中で、同行した友人の話として、「四川の犬は太陽を見て吠えるということです」と書いている。勿論誇張して書いているのだが、「四川の犬たちは地球のすべてが曇天であると信じて生涯を終える。まれに太陽が雲間からのぞくと怪しんで吠えるということらしい」とそのわけを述べている。したがって1月31日は天候に恵まれラッキーということらしい。成都は地形の関係で曇りや雨の日が多いと聞いてきたので、天気については万全の備えはしてきたが、いい天気で真冬なのに12～13℃まで気温が上がった。地図で見ればわかるように成都は四川盆地の中にあり、周囲は5千～6千米級の山々にぐるりと囲まれている。四川省の最高峰は7556米の貢嘎山(ミニヤコンカ)で、富士山のほぼ2倍の高さであるが、この四川盆地の一角に聳えている。日本国内には3千米を超える山は21座しかないが、四川省だけでこのくらいはあるのではないかと。日本人には想像しがたい地形である。気流がそれらの山々に当たって雨がよく降るらしいのである。

ホテル前からタクシーに乗り、まず杜甫草堂に向かった。現在の草堂は当然何度か建て替えられたものである。なにしろ杜甫は712年に生まれ、770年に亡くなっているのだ。今年は生誕1300年にあたる年でもある。



箱根小旅行をご一緒した王さん



杜甫の座像の前で記念撮影

彼は、58年の人生の中で4年間この成都で生活したが、ここで240編余りの詩を詠んでいる。一番有名な「春望」という題の詩、〈国破山河在、城春草木深……〉はとっても好きな漢詩であるが、この成都で詠まれた詩ではない。安史の乱(755年～763年)の時捕えられて長安の獄につながれ、その後脱出し転々とするがそのころに荒廃した長安を憂えて詠んだものである。余談だが、「春望」について漢詩の会で植田先生から解説があった。この詩は韻や平仄のきまりが極めて正確である上、遠景から近景に至る風景描写、そして心理描写が如何に優れているかを教わった。ご存知のように「詩仙」と呼ばれた李白とともに「詩聖」の杜甫は、唐代の詩人の双璧であるが、先生から解説を聞くとなるほどと納得できた。

タクシーは杜甫草堂の入り口で止まった。入り口は平屋で横長の瓦屋根の建物で、上方に「杜甫草堂」と扁額が掛かっている。30元払って入ると、石の台座に大きめの杜甫の坐像(銅像)が置かれている。やせていて心なしか愁いの表情を帯びている。像の横に「第三屆成都詩聖文化節」とのタテ看板が置かれていたが、第3回目

のどんな文化祭なのであろう。生誕1300年と関係ある祭りなのであろうか。坐像の奥に向かうと、「大雅堂」と書いた大きな額が掲げられている立派な建物があった。中に足を踏み入れると、誰だったか忘れたが中国の歴史上の有名な人の銅像がずらりと置かれていた。

園内は竹林に囲まれている様子で、その中を人の高さよりいくぶん高い赤茶色の壁が長く続いている。いつかテレビかガイドブックかで見た風景はこれだと思うと、ついに夢が実現したのだとの思いが込み上げてくる。この美しい壁と覆いかぶさるような竹林と木漏れ日をカメラに収めようとするが、人の流れが途切れずしばし立ち止まった。ようやく人がまばらとなり急いでシャッターを切った。美しい石畳の道が終わるころ、広い庭が眼前に現れた。真冬なのにチューリップが綺麗に咲いていた。蟬梅も黄色い花をたくさんつけていたが、これは盛りを過ぎていた。成都市は標高が4～500米のところにあるが、緯度は日本の種子島とほぼ同じなので、やはり東京よりは少しは暖かいのであろう。そしていよいよ草堂の前に来た。藁葺の如何にも草堂といった風情だ。浣花溪という場所に建てられたので「浣花草堂」とも呼ばれるそうだ。ガイドブックでは、「最初に作られた草堂の跡に北宋時代(960年～1126年)に祠が建てられた後、元から清代にかけて拡張され今の姿になった」とあり、この園内にはいくつかの建物があるが藁葺の草堂自体がいつの建物かはわからない。現代に生きる我々は、こ



杜甫草堂苑内の美しい赤壁と竹林

れを見ながら想像するしかない。草堂の中に入ると、書斎、寝室、台所などがそれらしく再現されている。

ところで、杜甫がこの場所で詠んだ詩に、「春夜喜雨」という詩があるが、この中に「錦官城」という言葉が出てくる。錦官城とは成都市の昔の名前である。錦城ともいう。このあたりは昔から絹織物が有名で、「蜀錦」と呼ばれた織物は中国三大名錦として天下にその名を轟かせた。それから錦官城または錦城という街の名前になったように思われる。市内を幾つかの河川が流れているが、錦江が市内を貫くように流れている。蜀の錦は、透き通るように綺麗であった錦江で洗われたようだが、今はそれほど綺麗な川ではない。

草堂をカメラに収めてから、幽玄ともいえる竹林をなんども振り返りながら出口に向かった。

(続く)

松本杏花さんの俳句

qiān lǐ tóng fēng
「千里同風」より

木漏れ日や踏み留まりぬこぼれ萩

shù xià xiàn rì yǐng
树下现日影

cǎi tà liú bù hé fēng liú
踩踏留步何风流

hú zhī zǐ diāo líng
胡枝子凋零

季语 胡枝子，秋。

赏析：我国唐朝诗人王维在《阙题二首》中吟道：“荆溪白石出，天寒红叶稀。”而如今日本俳人则描写了在林间疏影中的幽独意蕴，真是各领风骚，令人击掌叫好！。

秋桜ひそひそひそと風過ぐる

wēi fēng fú qiū yīng
微风拂秋樱

qiè qiè sī yǔ huā jiān xíng
窃窃私语花间行

hán xuān sì wú shēng
寒暄似无声

季语：秋樱，秋。

赏析：秋樱摇曳，微风纤柔，风穿树间，摇枝弄花，脉脉含情！此首俳句优美隽永，别具风姿。

塔公で過すのは今日で最後にしようと思ったその日、何気なく立ち寄った串焼き屋の親子のところで半日を過ごした。徐々に町が薄紫色に染まり始める頃、串焼き屋台の女主人は店仕舞いの支度を始め、すっかり私になつた少女は、「ねえ、お姉ちゃんも一緒に家に来て!」と私の腕にしがみつく。私が自分の食べた串焼きの代金を支払おうと差し出したお金を、受け取ろうとしない母親に、娘が「お姉ちゃんも一緒に行っていていいでしょう!? いいでしょう!?」と絡みつき、少女の母親も微笑みながら、「良かったらうちへどうぞ」と誘ってくれた。

夕暮れが近づくとともに、この家族と別れ一人で宿に帰る事が寂しくてたまらなかった私は、喜んでこの申し出を受け、ほんの行きずりで知り合ったばかりのチベット族母子と共に、夕暮れの塔公の町を家路についた。屋台の荷物を運ぶ若い母親を手伝いながら、子供達の手を引いて歩いていると、もうそれだけでちょっぴり幸せな気持ちになってしまう。普段の生活では当たり前過ぎて気付きにくい事だが、家族がいて、帰る場所があるというのはとても幸せな事だ。

彼らの家はお寺の脇の細い路地を少し入った場所にあった。単なる旅行者が町に住むチベット族家族の家にに入れて貰える機会など、なかなか無いチャンスだろう。不意に得られた幸運に嬉しさでドキドキしながら、町の一角に密集して建てられた建物の隙間を縫うように、人一人がやっと通れるような細い路地をくぐり抜け、彼らの家に連れて行って貰った。

特にお金持ちでもなく貧しくもない、街で暮らす平均的なチベット族と感じられたこの親子の家は、ソファやテーブル、ベッドなどの家具も置かれ、思いのほか近代的な暮らしぶりに感じられた。部屋の中央に置かれたテレビは、少女のやんちゃな小さな弟が、いつもこれで中国剣劇を見ては、自分の剣の腕に磨きをかけているのだらうと思うと、思わずクスクス笑いが込み上げてくる。あまりに可愛らしい彼にはつい手を伸ばして抱き上げたくなるが、自由を愛する少年はとにかく人に構われる事は好きではないらしく、私の手を振り払っては自分の好きなようにやりたい事をやっており、この時はソファの上で王様の様に寛ぎながら、自分の身近にあるものをワザと乱暴に床に放り投げてはケラケラ笑うという腕白な遊びにご満悦だった。

逆に少女は、一緒に遊んでくれる私にすっかり懐いてしまって、ピットリ私の傍に張り付いて、何かやってとせ

がむので、私はこれまで大事にとって置いた折り紙の残りをザックの中から全部放出し、花や鶴やその他色々な物を次々に折って見せた。

そうこうしているうち、家に戻ってから台所で何かコトコトやっていた子供達の母親が、串焼き材料の残りの肉で作ってくれたらしい、水牛肉の汁麺を皆に運んできてくれた。うわぁ〜、美味しそう!!! 丁度お腹も空きはじめていた私がお礼を言って汁麺に口をつけると、これがまた今回の旅で食べてきた麺の中でも一番美味しいと思われる味だった。この若い母親はとても料理上手な人なのだ。きっと年齢を尋ねれば私よりずっと若いに違いない、小柄でホッソリとした可愛いらしい雰囲気だが、二人の子供をきちんと育て、自らの商売も切り盛りする優しくてしっかりした素敵な女性だ。

こんな風楽しく過ごしていると、まるで今日初めて知り合った人の家に居るとは思われず、まるで自分が親戚の家にでも遊びに来ている気分になっていた。もし私が親戚のお姉さんみたいにこの家族と一緒にこの家に住み、串焼き屋の手伝いをしながらこの町で暮らしていたら、どんな感じだろう・・・毎日神山の神様に祈りを捧げ、可愛い子供達の成長を見守りながら観光客を相手に串焼きを売り、そのうちにカッコいいカムパの男性と恋に落ちて・・・ついフラフラと頭の中で、そんな想像の世界に漂い出してしまう。

楽しい時間はどんどん過ぎて、そろそろ小さな子供たちが寝てもよい時間になった頃、子供達の父親で、この家の主であると思われる、チベット族の男が帰ってきた。長く伸ばした髪に、カーボーイ・ハット。腰には剣をさした典型的なカムパ・スタイルだ。父親は戻ってきた家の中に見知らぬ外国人がいるのを見て、ちょっと驚いた様子だった。妻が私の事を説明してもなんだか居心地悪そうに私に背を向けており、そんな父親に少女が飛びつき、日本人のお姉ちゃんにちゃんと挨拶して、お話してよ!と絡んでいたが、それまでずいぶんゆっくり過ごさせて貰った私は、父親の帰宅でキリも良い事だし、ソロソロおいとまとする事にした。

「お姉ちゃん、帰らないでうちに泊まって! 私と一緒に寝ようよ」と少女はせがみ、母親も「泊まって行かない?」と訊いてくれたが、さすがにそこまでお世話になるのは気が引けたのと、自分の家で寛げない様子の父親にも申し訳なく、丁重にお礼を言って家を後にした。

真っ暗な路地を通り抜ける道案内で、懐中電灯を持っ

た母親が表通りまで私を送ってくれた。ほんの半日、一緒に居ただけなのに、不思議と気持ちを通じ合えるように感じられたこのチベット族の若い母親の事が大好きになっていた。別れがたい気持ちを抑え、暗闇の中でしっかりと抱き合ってお別れすると、暗い影の中で互いの姿が見えなくなるまで手を振り合いながらその場を立ち去り、私は少しだけ濡れた目尻を指で拭いた。

標高の高さから夜間はグッと冷え込む町で、暗く、シンとした目めき通りを自分の宿に向かって歩く道のりも、この日は胸の中がほんのり暖かかった。旅の後半、一人で過ごす時間が多くなり、塔公に来てからはヒューヒューと吹き渡る高原の風に吹かれながら、一日一日と旅の終わりを引き伸ばし、引き伸ばして過ごしていた孤独な胸の中にポツとろうそくが灯ったようなひと時だった。

塔公の町を出れば後は康定に戻り、そして成都に戻って飛行機チケットを買い、日本に帰るだけだ。この塔公が事実上、旅の終わりの土地だったが、その最後の最後をこんな風に過ごせて本当に良かった。これで心置きなく塔公を立ち去る事が出来る……。深い満足に包まれて最後の塔公の夜の空気を胸いっぱい吸い込んだ。

翌朝も相変わらず爽やかな明るい高原の朝だった。いつものように、すっかり馴染みとなっている例の不味い汁麺屋に足を運んだ。不味くて汚い店ながら毎日通っていれば僅かながらの愛着も湧いて、今日で最後と思えばそれなりに感慨深かったが、これだけの常連客に愛想笑いの一つも浮かべないこの店の店主はといった毎日、何を考えて生きているんだろう。さして忙しいとも思えない店の経営の合間に、自分の料理をあと少しでも美味しくする工夫でもしようと思わないのか？

昨夜のチベット族の若いお母さんが作ってくれた汁麺は美味しかったな……。あの人がお店をやった方が良いのに。

一人で勝手な事を考えながら最後の麺を食べ終わると、通りに歩き出した。

今日康定に戻ると決めてはいたものの、この町にはバスターミナルなど存在せず、どのように康定まで戻るかは行き当たりばったりだが、その件について私は全く心配していなかった。この辺りで一番大きな街となる康定までの交通手段は必ず存在するし、車でこの町を歩き来している人間は、おそらく皆タクシーの運転手だろう。康定まで至らずとも適当にそちらの方向に行く乗合タクシーに乗り込んで途中の町まで行けば、またそこから康定に向かう車はいくらでもある筈だった。

最後の朝の散歩として、町の端にある小高くなった場所のチョルテンに登り、相変わらず真っ青な空を横切っ

て町の上をたなびく色とりどりのタルチョを眺め、高原の向こうから吹き渡る風を感じた。すっかり観光化された土地だとの話もあるが、私はこの神様に囲まれた、こじんまりした町が大好きだ。きっといつか再び、この土地に帰ってくる。そう胸に刻んでチョルテンの丘を下ると、そこにチベット族の若者が乗った白い車が停まっていた。

「あなたタクシーの運転手？」

「そうだよ」

「私は今日康定まで行きたいんだけど、行く？」

「ああ、いいよ。だがお客が一人だけじゃ赤字になっちゃうから、ちょっと待ってくれ。他にも康定に行く人間を探しておくよ」アッサリと話が決まり、待ち合わせの時間と場所を約束すると、青年の携帯電話の番号を聞いてその場は別れた。

私は約束の時間まで、お寺の門前町に立ち並びお土産やアクセサリーの店を冷やかして、塔公を訪れた記念に綺麗な緑色の石が連なるネックレスを買った。

約束の時間に道端で先ほどのタクシーが来てくれるのを待ったが、約束したタクシーは一向に訪れる様子がない。30分ほど待ったところでその辺の雑貨屋に頼み、先ほど運転手に渡されていた携帯電話の番号に電話をかけて貰うと、案の定「他に用事ができたから行かれなくなったんだ。ごめんねー」とアッサリ言われてお終いだ。

やっぱりね……。アジアの旅で、こんなことは良くある事だ。携帯で連絡がついただけでも有難いものだ。それじゃあ、どうしようかな、と思っていたところに丁度乗合タクシーが通りかかり、運転手が「新都橋！新都橋！」と叫んでいた。

シンドゥツャオ
新都橋とは、塔公と康定の間にある町の名前だ。ああ～、丁度良いじゃん!!

「乗る、乗る～!!!」

私が車に駆け寄り「本当は康定まで行きたいんだけど……」と告げると短気そうな運転手は、「いいから乗れよ、まずは新都橋だ。そこで康定に行きたい人間がいれば行くさ」とせわしなく私を車のシートに追いやり、それで定員一杯になったらしいタクシーは、草原の真ん中を貫いて走る幹線道路を滑る様に走り出した。「さようなら塔公。また来るね……」少しはしみり別れを惜しみたい私のセンチな気持ちなど、入り込む余地もない慌ただしい出発だった。

今日のうちに康定まで辿り着けるか判らないけど、まあいいや。とりあえず新都橋まで行ってしまえば、今日はそこに泊まったって良いのだ。元々理塔からの帰り道、初めから新都橋に泊まって塔公に来れば良かったものを、

土地勘が無い為にわざわざ康定まで行ってから、再び塔公まで戻るなど無駄な遠回りをしてしまった。せっかく別の町に泊まれるチャンスだったのと思えば、ビザ切れまでの予備の日程もまだ1、2日程度はあるし、今夜新都橋に泊まるのも悪くないアイディアに思えた。

とにかく、この先どちらに転んでも問題無しとなった事ですっかり安心した私は、見知らぬ人達との相乗りタクシーのシートにリラックスした気持ちで身を投げ出した。車窓を流れていく高原の風景もこれで見納めだ。しっかり目に焼き付けておかなくちゃ・・・そう思ったのもつかの間、車の揺れに身を任せ、いつの間にかうつらうつらとまどろんでいた。

ガタガタと車が停車する振動に目が覚めた時は新都橋だった。新都橋という町の事は全然知らないが、康定から理塔に向かう長距離バスでは、いつもこの町の市場の脇がトイレ休憩の場所となっている。最近是中国でも少なくなってきたらしい、身震いするほど汚くて壁もドアも無い、使用にはちょっとした覚悟が必要な、俗にいう二ハオトイレだが、背に腹は代えられず毎回立ち寄る事となっており、一月前、この旅の出発で康定から理塔

に向かった時は、バスの中で知り合ったスウェーデン人の女性とここで並んで用を足したのだ。そんな事もあって、この新都橋のトイレだけは、私にとって馴染み深い康定から理塔までの道のりで、変に印象に残っている場所でもあった。

「小姐、康定まで行くんだな？ よし、客を集めるからちょっと待ってろ」

私が休憩がてら市場の二ハオトイレで、覚悟の用事を済ましたりしている間、短気そうな運転手はちゃんと私の要望を叶える努力に努めてくれたらしく、さして待つ事も無く康定行きのお客で車のシートは埋まってしまった。

一時は新都橋に泊ってみるのも面白いかとの気持ちが動いていたが、せっかくの運転手の努力を無下にする訳にはいかず、改めて考えればビザ切れまでにさほど日数も無いのに、帰国の航空券も無く、手持ちの中国元も底を尽きかけている立ち場としては、やはり素早く康定まで戻れる事は有難かった。そうして運転手に感謝しながら再び車中の人となった私は、程なくしてこの日のうちに無事康定まで戻る事ができたのだった。 (続く)

読む (番外)

ジャーナリスト山本美香さんの死を悼む

真中智子

8月20日、ジャーナリストの山本美香さんが亡くなった。シリアで戦闘に巻き込まれたとニュースが伝えている。

昨年5月にわんりいのこの欄で、山本さんの著書を紹介した。山本さんが雲仙普賢岳の避難所で生活して、初めて取材のスタート地点に立てたエピソードに触れた。震災から約2ヶ月。被災者と同じ視点に立つ山本さんの姿勢に打たれた。紛争地帯で、子どもや女性に視点を向けた取材姿勢だったという。

皮肉にも、8月は日本中が平和を考える季節だ。私はぼんやりと、ナガサキとヒロシマのことを想っていた。震災の原発事故では、日本中が騒然となり、もしかしたら東日本には住めなくなるのではという恐怖に襲われた。危機的状況は脱したもの、豊かな自然は汚染され、未だに植物、蝶、虫、魚などの生き物に与えている影響が報道されている。取り返しのつかないこの事故のせいで、放射能の怖さによりやうく私たちは気が付いた。

この放射能をあえて、わざわざ、ばらまく核兵器が、67年前のナガサキ・ヒロシマで使用されたことを想

うとき、本当に戦争の愚かさを心底感じずにはいられない。アメリカがどうだとか、日本がどうとか、そのような次元をすべて超えて、なんてくだらないことをしたのだと、そのくだらないことを行ってしまうのが戦争だとしたら、なんて戦争はくだらないのだろうと、それだけだ。

世界はつながっている。海だって、空気だってつながっている。だから原発事故当時、世界中が日本の対応に注視した。世界中のすべての人たちが被災者になる可能性があったから。でも、だとしたら、核戦争が起これば、世界は、勝者も敗者もなく、被害者だけになるのではないだろうか。

山本さんの死を想うと、哀しくて仕方がない。面識もなく、著書もそんなに読んだことはないのに、ニュースを見ながら哀しくて泣けてくる。現場で何が起きているのか、戦闘地帯に暮らす人たちを記録することで、戦争のくだらなさを伝えたかったこの方が、そのくだらなさに関わり込まれて亡くなったことが悔しくてならない。

「四姑娘山・写真だより」の里を訪ねて—② 天空の家

佐々木健之

2012年6月10日(日)、丹巴の宿に収まった。今夜から3連泊予定(後で述べる事情で1泊となってしまったが)のホテルは「興丹賓館」という。1階が市場、その上がレストランとホテルという変わった造りの建物であった。われわれの一行10人の部屋は最上階の5階(4階だったかも)の5部屋で、屋上に客室が一行に並んでいた。良くいえばペン트ハウスといえなくもない。エレベータは無い。部屋の入り口は青天井の屋上から出入りする。ドアの外には庇など無く、雨が降ると屋上出入口から部屋に入るまでに濡れてしまう。言葉の通りアウトドアだ。着いた日はすでに雨が降ったので、私と河本さんとでひと部屋の室外の足下は、コンクリートの上に雨水が溜まっている。湿っぽいところでイヤだなーと思ったが、翌朝になると不思議と乾いていた。室内の浴室も同じで、シャワーを使った後は、水が澱み、いつまでも水がはけない。ところが、翌日になるとちゃんとして乾いている。この現象が中国の不思議の一つで水はけはテキトーでも翌日には乾くからこの程度の施工でよいのか。日本だと水はけが悪いと床は乾かず、カビの楽園になってしまう。

夕食は大川さんなじみの食堂で辛くないおかずを頼み、夕餉となった。大川さんのチベット族の奥さんと、お子さんも現れて皆よろこぶ。

明けて6月11日、朝の散歩に出ることにした。私の海外旅行の楽しみの一つは、早朝の散歩である。普段から早起き(若いときからです)なので、何もしないと朝食までの時間を持て余してしまう。だから朝の4時過ぎにホテルの階段を下りて表通りに出た。

丹巴の街は溪谷の街だ。大渡河という早瀬が二股に分かれて、大金川と小金川と名前を変える合流点を中心に



山の中腹にある、丹巴式チベット民家の家々、右下は丹巴の街

街並みが展開している。附近は傾斜地ばかりで、わずかな平地は見逃すことなく建築物で覆われている。街の背後は山で、この山へ登って、街並みを見下ろしてみようと思ったわけである。夜明け前であたりは暗い。静まりかえった繁華街を抜け、明るいときに見当をつけておいた上り坂の道に行く。しかしその道はヘアピンカーブになって下向きになり、街のはずれの方に続いていた。見当違いであった。出発点の繁華街へ戻り、別の枝道から山の方へ続く道を探った。まだ暗い街の裏手に、暗くそびえる山があった。

見当をつけて入り込んだ道は蛇行しながらうまい具合に上へと伸びている。しかし街灯が無いので暗く、光ってそれとわかる水たまりがあり、下水道工事らしい掘削跡もあり、そういうところはぬかっていた。足下が暗く、懐中電灯を宿に忘れたことが悔やまれた。

屋並みが無くなると、道は小川に沿ってつづらおりで登っていた。小川を渡るところは鉄板の橋が架かっていたが、妙な具合に路面が反射するので鉄製の橋とは近づくまで解らなかった。鉄板に規則的な透き間があり、虚空に足を踏み込んだらという恐怖があった。透き間の形がつかめないので、足さぐりで「石橋をたたいて」鉄板の橋を渡った。橋を越えたところで人家が無くなり、山腹をうねる明瞭な林道となった。

ようやく空が白んできると、黒くそびえている四方の山々が見えるようになった。林道は山腹をなぞって適当な傾斜で登っていた。カーブを曲がるごとに視界が開け、まだ寝しずまっている丹巴の街が足下に沈んでいた。



ひとけのない早朝の丹巴中心部。



朝の散歩で、花を透かして見下ろす丹巴の街、大渡河が大金川と名前を変えて直角に曲がる



丹巴郊外の丹巴式チベット民家

15分程進むと、林道よりも効率的に登れる脇道を見つけた。林道歩きはそろそろいやになったので、喜んでこの脇道に入り、登っていった。草地の小道は色とりどりの小花が咲いてハイキング気分である。効率よく高度を稼いでいくと突然、上方から男が1人、軽快な足取りで下ってきた。黒っぽい服装の若者で、足ごしらえは街で穿くような靴。「怪しいものではないよ」のつもりで「你好^{ニイハオ}」と挨拶するとあちらもいぶかしい目つきで「你好」と返事。私の行く手には人家がないと思っていたが、そうではなく、山の上には家があり、そこに住む住民が出勤か外出する姿だったのである。彼の出現には少し驚いたが、先方も朝早い時刻にカメラを提げて観光客丸出しのおっさんが登ってくるとは思わなかったろう。

これで、さらに登れば人家があることがわかった。なおも登って行くと、小籠を背負ったおばさんが降りてきた。やはり「你好」と挨拶。あちらも「你好」、続いてなにやら話しかけてくる。

山道が少し平になり、数軒のチベット風の民家と傾斜した麦畑が現れた。すでに一時間も登ったので、高度計を見るとおよそ300mの高度を稼いだ。日の出は過ぎ

て、あたりの山が見渡せた。ちょっと傾斜が緩んだ場所には、天空の秘密の棲家といったおもむきの家々が、魔除けの角^{ツノ}(屋上の四隅にある突起)を丹巴の谷へつきだして建ち並び、なかなかの景観である。私が登ってきた山道はなおも上へと続いている。仰げば高度差200mくらい上方にもチベット風民家が散在するのが見える。しかしこれ以上進むと、朝食に間に合わなくなるのと、民家のあいだを通ると、もしかして放し飼いの犬に吠えられたりしたら怖いので、引き返すことにした。

下りは早い。それでも後ろから来た新たな「通勤者」に追い抜かれてしまった。彼らは高度差300mくらいある通勤路を毎日通うのであろうか。行きは下りだからよいとして、帰りは登りなので、1時間近くかかるだろう。素面の時はまあよいとして、仕事の帰りに一杯飲んでしまったら私ならとても帰れそうもない。近年では車が入る林道が民家まで延びている。しかし、車のない人や、女子供は昔ながらの山道をかよっているようだ。もっと奥地の村では、車が入らない所もある。遠望だが車道が延びていない村をずいぶん見た。

順調に下ると、漢人と思われる半ズボンのおじさんが登ってくるのに出会った。とりあえず「你好」と声かけた。相手も「你好」といい、なんだかんだと話しかけてきたが、曖昧に笑うしかなかった。2日後また同じ道を歩いたとき、このおじさんを再び見かけた。その時は見晴らしのよい中腹の小広場で、体操をしていた。街から山腹まで毎日登り、体操をするのを朝の日課としているらしい。

私が林道途中から入った山道は、実は街のすぐそばに最初の入り口があって、小川の橋から続いていた。林道を歩いていたときは暗かったので入り口を見逃したのであった。

朝食時間に間に合うよう、少し急いで山道を下る。暗いときに、おそろおそろ渡った鉄橋は、普通の安全な橋であった。ホテルの建物に戻ると、階下の市場は野菜などを地べたに並べて、商いの真っ盛りで賑わっていた。

朝食は一行10人と、前日決めた集合場所に集まり、大川さんの案内で近所の軽食屋に入り、「饅頭^{マントウ}」などで済ませた。

(続く)

.....
丹巴県:中国四川省カンゼ・チベット族自治州の東部に位置する県。中国の「県」は日本の県の規模とは違い、「市」の感覚である。中心市街地は海拔1,800mにある。チベット族の中でもギャロン・チベット族(嘉絨藏族)と呼ばれる人々が多く住む。域内の著名な名勝には美人谷(美人の多さと風景の美しさで知られる)、古石碉楼(石造の塔)などがある。

(ウィキペディアより改変)

四川省チベット高原・花の旅 (2012年7月13日～21日) 中村康

『わんりい』誌上、折に触れて掲載の「四姑娘山・写真だより」でお馴染みの四姑娘山自然保護区管理員の大川健三氏の案内で、毎年のように四川省に花見に出かけて、今年は6回目となった。何度、出かけても新たな花との出会いがあり、興味の尽きることはない。

8名の参加者のなかで中村康氏に今回の花旅の様子を紹介してもらった。(関根茂子)

四川省カンゼチベット自治州の高原の花を昨年に続いて訪問した。花心がなくともそれなりに興味深い。ここ、カンゼチベット自治州は元来はチベットのカム(康)地方の東部にあたり、それを切り分けて四川省に属させた州である。宿泊したのは州都・康定で、カム(康)を平定するとの意味をもつ。ここを拠点に3台の車に分乗し道路際の花々を愛でる。しかし、ここは高度4000m近くのところを訪れているので、高山病には用心して行動しなければならない。

【キノコ鍋】

康定は都会ではあるが、山の中の街で、朝市があり、たくさんのキノコが売られている。一夜キノコ鍋専門店です。15分間煮立ててから食べないと中毒の可能性あるとの注意書きがあったが、その注意を聞かばこそ、次々と煮立つそばから食べてしまい、待っている人の口には入らない。



朝市で売られている様々なキノコ



スケッチ：関根茂子



スケッチ：関根茂子



木格措(措はチベット語の湖の意味)

【木格措】

康定の北21kmの観光地。最近の中国観光地で多いのだが、入口でバスに乗り換えさせられ、目的地には直接はいけない。終点の木格措までひたすらバスで山道を登る。対岸に船で渡り花を見る。日曜日とあって大勢の中国人観光客と一緒にいる。しかし対岸まで来る人は少ない。たまたま日本語を習っているという学生が花のきれいな所を案内してくれた。

【折多峠】



折多峠で休むサイクリストたち

康定から30キロ西、高度4238m。州を横断しチベットのラサまで通じる国道上にある。この辺りは広くよく舗装されている。その急坂を夏休み中の学生が最新の自転車に乗り若さで登ってゆく。

【チベット人の村落】



チンゴー麦畑とチベット人村落

ミニヤコンカ山(7556m)が望める峠を目指し康定から南下したが、霧のため青いケシを見ただけで引き返した。車中から見たのチベット人村落はチンゴー麦(高所に強い裸麦の一種)を栽培し、桃源境のようなたたずまいを見せている。

帰途に車が泥にはまり、抜け出すのに1時間近くかった。小型ワンボックスカーで悪路対策の牽引ロープもスコップも持たず、作業にも慣れていない。道具を傍の家から借り、電柱から針金をはがし牽引したが、切れてお手上げである。幸い、通りがかりの四駆のトヨタランドクルー

ザーの親切的な若者にロープ牽引してもらい助かった。木格湖で出会った学生や、当地を観光ドライブする人など漢族の若者の変貌を実感した。一方、我々の若い運転手はチベット族で漢字が読めない人もいる。その格差に暗澹たる思いもする。

【双子の石塔】

康定の南方50kmの朋布西にあり、直径11m、高さ30m。非常に正確に作られ、16の面の幅は2.5cmと違っていない。塔は威信のために建設されたといわれるが、正確な用途は不明である。この種の石塔はチベット圏に多数存在する。以上で今回のトピックスを紹介したが、まだまだ面白いことが多そうな四川省チベット自治州の旅である。

(写真撮影：中村 康)



【旅で見た花々】

* イシモチソウの仲間とランの仲間以外の写真は中村康の撮影によります。



トチナイスウの仲間



エーデルワイス



イシモチソウの仲間(撮影：大川健三)



ランの仲間(撮影：大川健三)



ジンチョウゲの仲間



サクラソウの仲間



シオガマの仲間

スリランカ人の物差し

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

スリランカ人の物差しと言っても、なにも長さを測るメジャーの話ではありません。世界中どこに行っても1メートルは1メートルで同じです。スリランカだけが、90cmでも、120cmでも1メートルとしてOKという訳ではありません。スリランカで生地を1メートル買おうと思えば、1メートル分しか売ってくれないことは当たり前前の事です。

今回は頭の中の感覚的な物差しのズレの話をしてみます。物差しのズレはアジアを歩き回っている方には判って頂けるでしょう。海外旅行に日本の尺度(物差し)を持っていかれると、戸惑うことが多々あります。また、日本ではこんな簡単な事が、何でこんなに面倒くさい事になるのかとウンザリすることがあります。今回は、日本とスリランカの物差しのズレを中心に書いてみようと思います。

まあ、シンガポール・マレーシアあたりを除いてアジア地域ではどこでも当てはまると思いますので、「私の好きなあの国ではこんな事がある」と言う方も多いと思いますが、私の立場ではスリランカを例にして話を進めていかざるを得ないことをお許しください。

一番身近な例を挙げるとすると時間の事です。もちろん、スリランカでも1時間は60分である事には変わりありません。でも、僕が駐在していた時には、某国営放送局が朝6時の時報を告げた直後に、他チャンネルに回してみると6時の時報前だったなんて事もあったので、両TV局間の時報の何秒かのズレは一日中残る訳です。スパイ小説ではありませんが、国家的謀議をするために時計を合わせても、ずれる事があって謀議が失敗するかもしれませんね。

さて、日本からの旅行者の方が最初に直面するのが時間感覚のズレでしょう。日本から持ってきた頭の中の物差しでは、1時間もあればこれぐらいの事ならば2、3件は出来るだろうと考えます。ところがスリランカではそんなに簡単に物事が進みません。特にスリランカの人達の能力が低いという事ではありません。「急いで、効率良くやる」という概念がスリランカ人の意識の中に薄いのです。日本人が、日本ならば「この様にやるのに」とあれやこれや考えて、「さっさとやってくれ」とイライラしても仕方ありません、何故ってこれがスリランカのスタンダードだからです。

周りのスリランカ人の様子を観察しながら、日本との「物差しのずれ」を認識した上で、時間感覚をスリランカに

滞在される間だけでも「スリランカの物差し」に調整するとイライラする事が減るでしょう。

銀行や両替商で両替をするのであれば、係員は慣れているのでスムーズに手続きが進みます。慣れているとはいってもPCで簡単に出的金額を分厚い台帳に手作業で記帳する等驚くべき事があります。でもそれは窓口に着いてからの話で、窓口に立つまでに相当の時間を並んで待たなければなりません。スリランカの人達にとっては、並んで待つというのは至極当たり前の事なので、彼らの時間の物差しでは、長時間並んで待つのは普通の事です。並んでいる間にお喋りの花がそこいら中で咲いて待つことを楽しんでいるようでもあります。隣の大国のように並んで待っている列が崩れて修羅場になるようなことも稀です。たまには有りますが・・・。

ましてや、スリランカ人の友人に両替や立て替えた費用の精算等をお願いすると、とんでもなく時間が掛かる事があります。僕の観察では、原因は当日の通貨レートを確認するのに手間がかかるのです(新聞に掲載されているのは前日のレートで、直近のレートは銀行に問い合わせないと判らない)。前日レートでも構わないと言っても、普段はアバウトなスリランカ人が友人である日本人(僕の事です)に損をさせてはいけないと言って、むきになって直近のレートを求めます。更に、最初に計算した金額と検算した金額が違うので、もう一度検算したら、また違う金額になって時間が掛かる上やる気を失ってしまう様なケースも多くあります。ここで催促すると、焦って余計に時間が掛かることもあるのでしばらく待つと良いです。

計算するのを忘れた訳では無く、自分の度重なる計算ミスに動揺し落胆しているだけで、落ち着けばちゃんと計算してくれます。両替等お金に関する事は、日本での必要時間と比較せず、十分に時間に余裕をもって臨むのが良いです。相手は善意の塊のようなスリランカ人で、僕らに良かれと思ってしている事が裏目に出る事が多いだけです。

必要時間を長めに見込んでいて、たまたま早く用が済めば付近を散歩でもする余裕ができますよ。

(続く)

いよいよ、9月8日～9日に代々木公園でスリランカフェスティバルが開催されますので、是非ともご来場下さい。(赤岡)

2012年スリランカフェスティバル

9月8～9日 両日 10時～17時

於：代々木公園イベント広場

千代田線・明治神宮前/JR山手線・原宿下車徒歩5分

この7月から教育現場で仕事をするようになり、「生きる力」という言葉をよく聞くようになった。その背景は日本の子供たちの生きる力が乏しくなっていることへの懸念である。そもそも「生きる力」とはどんな力のことなのだろうか？私が真っ先に浮かぶのは、ケニアの子供たちのそれだ。ケニアの子供たちのあふれるばかりの生きる力はどこから生まれてくるのだろうか？

日本の子供たちの生活スタイルでは、現代の子供たちは勉強が中心であることが多い。唯一自由な時代であるはずの幼児時代でさえ、習い事を掛け持ちしたりして忙しかったりすることも多い。子ども達がそれぞれの発達段階を十分に生きず、将来役に立つかもしれない何かの準備に時間を費やしている生活では、人間形成に欠かせないさまざまなことを体験出来ないだろう。

自立出来る人間として育つには、生活して行く上で必要な生活術を体験する必要があると思う。もちろん学校の勉強だけではない。体験による裏付けを持たない知識ではなく、生活の中から学び取った知恵だ。自然の中で衣食住のすべてを調達してきた昔の生活からはるかに遠ざかってしまった現代の生活の中でも、子ども達はやはり生活に基づいて必要な知恵を学んで身に着けないといけない。

そんなことを考えていると、ケニアでは恵まれた生活をしている子ども達は少ないけれど、だからこそどう生きたいかを考え、人生の目標を持って大人になるんだろうなと思う。親も子ども達に家族のための手伝いなどの仕事を与え、子どもたちがこれらの仕事を通して大人になった時の準備をさせている。親は、これらの仕事を毎日子ども達に与えることが子ども達の自立の手助けになると知っているのだ。農作業の手伝い、水汲み、薪拾い、動物の世話、掃除、洗濯、そして兄弟姉妹の世話など、たくさんの仕事と学校の勉強は同じくらい大事なことなのである。

今の日本の生活は、子ども達が「生きる力」を育てる時間と機会が少ないように思う。それでは子供たちは「生きる力」を失ったのであろうか？私はそうは思わない。今の日本は、「生きる力」が乏しくても生きていけるという事なのだと私は思う。「生きる力」を発揮しなくても、生きることが出来る時代なのだ。

また地域に老若男女がバランスよく存在していることも大切だと思う。ケニアの農村では、たくさんの子供たちがたくさんの大人の目に見守られながら生活している。

しかし、ナイロビのような都会では、核家族化ということも既に起こってきている。

また、子供にすべてを与えることは危険だと思う。自分で努力をして必要な物を用意しない限り、人生は何も与えてくれないことを、早くから子供は知るべきではないだろうか？これは、苦勞の多い生活の中でも笑顔を絶やさない、ケニアのたくましい子供たちが私に教えてくれたことなのだ。

中国の笑い話

先日、友人から一冊の本を手渡された。タイトルは「365 夜笑話」というもので、初めの方は5、6行の短い話が多く、ざっと目を通して、思わず笑ってしまった。その面白さをどこまで伝えられるか分からないが、少しずつ紹介したい。

第1話：靴下の穿き替え

朝早く独りで起きて着替えをした小明は、「ママ、見て。僕独りで着られたよ」母親は、彼が靴下を穿き間違えて、片方は白、もう一方は黒なのを見つけて言った。「靴下は両方同じ色のを穿かなくては駄目よ。部屋に戻って同じ色のに穿き替えていっちゃい」。

部屋に入った小明は、すぐに戻ってきて言った。「ママ、部屋にある靴下も片方が白で、もう片方は黒だったよ。穿き替えても同じだよ」。

第2話：頭痛

「ママ、お腹が痛い」と小明が言った。母親は、「お昼をまだ食べていないから、お腹が空いて痛いのよ。何かお腹に入れれば、すぐに良くなるわ」と言った。

その日の午後、小明は隣家へ遊びに行き、隣のおじさんが病気で頭痛が酷くて寝ているのを見つけた。小明がおじさんに言った。「頭が痛いのは、頭が空っぽだから痛いんだよ。何か頭に入れれば、すぐに良くなるよ」。

第3話：友達のお母さんはどうする？

ある時、小宝の成績が悪かった。母親は怒って言った。「小宝、去年は貴方の成績がクラスで一番だったので、ママは自慢だったのに、今回はどうしたの？貴方は何時も良い成績を取っているのに」。

小宝は、しばらく下を向いて考えていたが、やがてにっこりして母親に言った。「友達のお母さんたちもみんな、友達の成績を自慢したいのに、何時も僕がよい成績を取ってしまうと、友達のお母さんが困るじゃないの」。

(翻訳：有為楠君代)

今回の料理講座は、会員の中から「中国東北地方の主食であるマントウの美味しい作り方を会得したい」、との強い希望が出て、それではと山西省出身の何媛媛さんをお願いして開催された。

マントウの作り方をリクエストした彼女に言わせると、中国で食べるようになかなかふくらとふくらまないのだそうだ。粉食文化は奥が深い。餃子の皮作りも粉の質や水加減や捏ね方伸ばし方など一筋縄では行かないのだ。

以前、留学生たちに「餃子を作って日本の人と交流しよう」と提案した時、留学生たちは皆、「餃子の餡を包む手伝いをしたことはあるが餃子の皮は作ったことがない」と云って尻込みをした。それでも留学生の一人が中国のお母さんに電話をして教えて貰い、我が家で二人で水餃子に挑戦してみた。成形した姿はなかなかのもので二人で感激したが、ゆで上げると、まるでモンキーバナナのように膨らんだ。彼の名誉のために言えば、汗を流して捏ねた皮はシコシコと歯ごたえがあり、それなりに結構な逸品で評価を惜しまない。しかし、「留学生たちと料理で交流」の時は、結局、何媛媛さんに助っ人をお願いした。

そういえばもう10年くらい前になるが、和光大学に留学していた女子学生に指導して貰って、会のメンバーが彼女と一緒にワンタン作りをしたことがある。彼女のワンタンは、看護婦さんの帽子のようなオシャレな形だったが、皮の厚い、赤ちゃんの握りこぶしほどもある巨大なワンタンだった。その時は、日常食のワンタンは大きいのだろうと気に留めなかった。その



何さん(右から2人目)が粉をこねる手つきを真剣に見る



成形したマントウ(左)と花巻(右)、花巻は何さんのように(中央の花巻)いかないが味は美味



テーブル一杯に料理を並べ、ウーロン茶で乾杯した後で皆で賞味した。

後、殷秋瑞夫人のお母さんが来日中に、中国講座の皆と一緒に作ったワンタンは、形は看護婦さんの帽子だが人差し指の先ほどの、桜の花びらのように可憐で頼りない風情があり、口の中ではらりとほどけて肉汁のうまみが口の中に広がった。

さて、花巻もホテルや晴れの日のご飯としてマントウと同様に作られるが、この方は以前に2度ほど指導して頂いたことがある。なかなかバラの花のように美しく巻けないのでマントウと併せてもう一度ご指導をお願いした。

マントウと花巻の他、蒸し魚料理や夏野菜たっぷりの山西省家庭料理など3種類をご指導いただき、出来上がった料理他を、テーブル一杯に並べてウーロン茶で乾杯し和気あいあいと料理を楽しんだ。

マントウ・花巻他の料理レシピを“わんりい”のHPに掲載しましたのでご参考下さい。(田井記)

◆わんりいの催し

《ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!》 Vol.1

◆会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など) ◆定員：15名(定員になり次第締め切ります)

▲2012年9月30日(日) 10:15～11:45

▲場所：まちだ中央公民館・6F 視聴覚室

田市原町田6-8-1/小田急線町田駅南口徒歩5分
JR横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分

▲講師：Emme(歌手)

東京芸術大学邦楽科長唄別科卒業。日本の伝統音楽・長唄の素養をバックにした、たおやかなオリエンタルヴォイスの独自の歌のスタイルを誕生させている。

日本人が長い間、嬉しいとき辛いときの折々に歌ってきた童謡や抒情歌などの愛唱歌は、日本人の心の歌といえるでしょう。ボイストレーニングを組み合わせて、気持ちよく歌いましょう。



第1回の今回は、「里の秋」「紅葉」「赤とんぼ」を歌います。外国の方も歓迎です。

◆当日は動きやすい楽な服装でご参加ください

●申込み：わんりい ☎042-734-5100

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

◆わんりいの催し

月餅を作って遊ぶ会

蓮実入り小豆餡・ナッツ餡・棗入りナッツ餡
カボチャ餡・ココナッツ味餡の5種類を作ります

▲場所：まちだ中央公民館 6F・調理実習室

町田市原町田6-8-1/小田急線町田駅南口徒歩5分
JR横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分

▲月日：2012年9月13日(木)

▲時間：13:00～

▲会費：1500円 *お土産付き

▲定員：先着15名



◆申込み：☎050-1531-8622(わんりい)

E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp

◆わんりいの催し

第12回 中国語で読む・漢詩の会

▲場所：まちだ中央公民館 6F・視聴覚室

町田市原町田6-8-1/小田急線町田駅南口徒歩5分
JR横浜線町田駅ルミネ口徒歩3分

▲月日：2012年9月16日(日)

▲時間：10:00～11:30(講座は午前です)

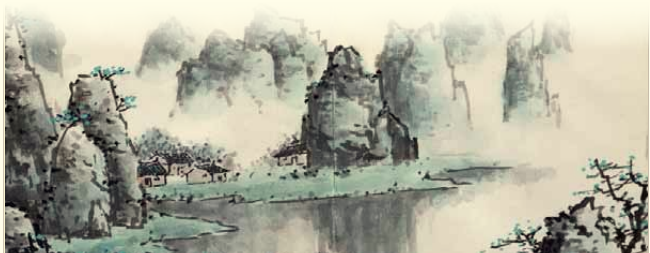
▲講師：植田渥雄先生(現桜美林大学孔子学院講師)

▲会費：1500円 ▲定員：20名

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎050-1531-8622(わんりい)

E-mail: ukiuki65@yahoo.co.jp



‘わんりい’に掲載の

『媛媛讲故事』が本になりました。

久美堂本店(カリヨン広場前)で発売中!

中国文化に影響を与えた物語

「蒼海拾貝」一粒書房刊 定価：1,000円

‘わんりい’連載中の、中国に伝わる壮大な天地創世の神話から八仙人の奇想天外な話まで26話の物語が、‘中国文化に影響を与えた物語「蒼海拾貝」として、可愛らしい本に纏められ、今年五月出版されました。

久美堂本店(小田急東口・カリヨン広場前)の、町田市在住作家のコーナー(店内エレベーター前)に置いてあります。手に取ってご覧になって頂ければと存じます。

●問合せ：‘わんりい’ 042(734)5100



使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついでに折に‘わんりい’の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

[9月の定例会]

◆定例会：9月11日(火) 13:30～ (田井宅)

◆10月号の発送日：10月1日 13:30～(田井宅)

第22回中国文化之日 ●そのI《中国西南秘境の声》プーアル少数民族歌舞来日公演

「口があれば歌える、足があれば踊れる」というほど暮らしに溶け込んだ少数民族の歌舞

- ▶公演日：2012年10月19日(金) 19:00～/20日(土) 13:30～/18:30～21日(日) 13:30～(全4回)
- ▶会場：日中友好会館大ホール
- ▶1000円(全席指定) 当日/1200円(空席がある時のみ)

●そのI《展覧会・プーアル印象展》

独特の彫り進み木版画、民族楽器、民族衣装、生活用品などの展示。中国西南奥地の暮らしや多彩な文化を見る。

- ▶会場：日中友好会館美術館
- ▶会期：2012年9月27日(木)～10月21日(日)水曜日休館
- ▶開催時間：10:00～17:00 初日は15:00～
※上記公演期間は、上演終了後まで



◆お問合せ：公益財団法人 日中友好会館・文化事業部 ☎03-3815-5085

平成24年度(第67回)文化庁芸術祭主催公演

2012アジア オーケストラウィーク

◆会場：東京オペラシティコンサートホール ◆開演：19:00

- ▶10月2日(火) ^{モッポ}木浦市立交響楽団(韓国) 指揮：ジン・ユンイル
曲目：サムルノリと管弦楽のための「シンモドゥム」(パク・ボムフン)
ピアノ協奏曲第3番ハ短調作品37(ベートーヴェン)
ピアノ：キム・ダソル
チャイコフスキー：交響曲第4番

- ▶10月3日(水) ハノイ・フィルハーモニー管弦楽団(ベトナム)
指揮：クリスティアン・シューマン
ベトナム狂詩曲(ド・ホン・クアン)
チャイコフスキー、ピアノ協奏曲第1番変ロ短調作品23
ピアノ：ルー・ホン・クアン
ドボルザーク、交響曲第9番ホ短調作品95「新世界から」

- ▶10月4日(木) 九州交響楽団 指揮：岩村 力
四つの博多のうた 黒田節、どんたく節、博多子守唄、博多かつり節(石丸寛編曲)
チャイコフスキー、ヴァイオリン協奏曲、ヴァイオリン：矢野 玲子
リムスキー・コルサコフ、交響組曲「シェエラザード」

◆東京公演入場料：S席3000円 ペア券(S席2枚)5000円 A席2000円 B席1000円
3公演セットS席7000円 A席5000円 ※全席指定

◆申込み&問合せ：日本オーケストラ連盟 ☎03-5610-7275(平日：10:00～18:00)



山下孝之 ケーナ・ライブ

- ▶2012年9月22日(祭)
- ▶開演：19:00(18:00開場)
- ▶2500円(1ドリンク付き)(要予約)
前回と異なる曲いろいろをお楽しみ下さい。



◆町田 Beat Box Cafe(町田駅北口徒歩8分)
中町3-5-6 ☎042-720-2305 <http://beatboxcafe.jp/>
世界各国の150種以上のビールも待っている!
(差額は各自の負担です)

◆問合せ&予約：090-7729-1335(山下)

スリランカ大使館主催
行ってみよう!!

2012年スリランカ
フェスティバル～



- ▶9月8日(土)・9日(日) 両日10時～17時
- ▶代々木公園・イベント広場

千代田線・明治神宮前/JR山手線・原宿下車徒歩5分
スパイシーなスリランカ料理、紅茶、ビール、アラック(ココナッツ酒)等スリランカ特産品の販売やスリランカの伝統舞踊などスリランカ文化を体験、又スリランカ観光情報を手に入れる機会です。